21世紀の甲子園

硬式へ移行して12年 奄美群島からの初悲願

大島

［鹿児島］

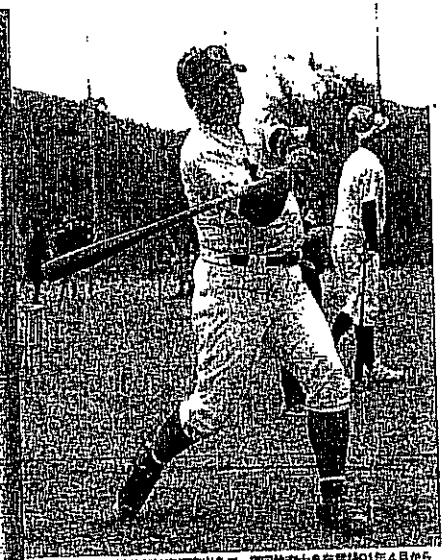
取材・文＝藤原奈緒子　写真＝上野弘明

最高気温が20度を超え、春の陽気に包まれた奄美大島に大きなニュースが届けられた。21世紀枠の九州地区推薦に挙げられていた大島が選ばれ、悲願の甲子園初出場が決まったのだ。奄美市内には花火が上がり、防災無線で市内にニュースが放送された。地元では「大高（だいこう）」と呼ばれ、親しまれている進学校だけではなく、島のみんなの夢がついに実現した。

鹿児島市内まで約380キロ。フェリーで11時間かかる離島の地理的ハンディを乗り越えてきた。なんといっても練習試合数が少ない。沖縄本島へは本土から強豪校が訪れるが、奄美を訪れる学校はほとんどない。島内で野球部がある高校は大島を含めて4校。日帰りで近隣の島にいくとしたら、フェリーで3時間以上かかる想定しかない。気象条件でフェリーが欠航し、練習試合や甲止になることもしばしば。それを通めてくれるのが野球のOBだ。他校と練習試合をするために、OBチームとの対戦で実戦感覚を養ってきた。

奄美市内には本土の公立校にはない独特の悩みがある。島外に出るにはいくつか関門がかかる。試合も勝ち進めば進むほど滞在費がかさむ。台風接近時には欠航に備えて出発日を1日早めたり、またフェリーから飛行機に変更するなど苦労は絶えない。移動、滞在費も含めすべて個人負担になるという。

そんな環境でも島の選手たちはたくましい。「バットの振る力が強いのに驚いた」というのが5年前に赴任した渡邊恵亨監督の島の選手たちへの印象だ。鹿児島本土の公立校の選手たちは、強豪私学に対してパワーで劣ってしまう。だが、島の選手は強い相手にも力負けしない。「これは相手の私学からすれば厄介だと思いましたね。昔、僕たちが高校生のころは島の学校と当たったら『絶対勝てるからラッキー』だと思った。でも今はそれがない」。



渡邊監督は鹿屋農出身で、福岡教育大を卒業後91年4月から教員の道へ。志布志、川辺、武岡台を経て、10年に大島に赴任（副部長）し、11年4月から監督としてチームを率いている

「甲子園は夢だけど、ずっと追い夢だった」（渡邊恵亨監督）

本土の公立校では歯が立たない強豪校にも、面白い戦いができるのではないか。渡邊監督は打撃強化を目指した。各場は130キロのバットを振らせてスイングスピードを高めた。5年後、その目標は現実になった。昨春の県大会では神村学園、昨秋は樟南と甲子園常連校を破って県4強へ進出。とうとう私学強豪の牙城を破った。

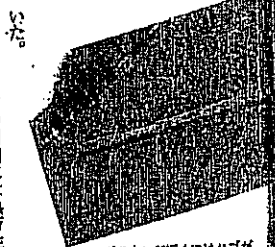
島民皆に愛された「甲子園」の目標達成

鹿児島は長い間、鹿児島実、樟南（旧鹿児島商工）、鹿児島商の「御三家」と呼ばれる学校が常に甲子園へ行くことは夢だった。

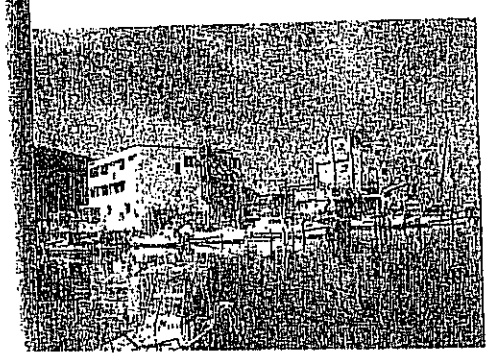
今でも有力選手のほとんどは島を出てしまう。だが、少しずつ「島から甲子園へ行こう」という流れも生まれつつある。主将の瀬原龍波は高校進学時に私学強豪の誘いを断って島に残った。「中学のときから知っている選手ばかり。みんなで頑張れば甲子園に行けると思った」。四番・小野浩之介も「みんなが行くなら大高へ」と大島進学を決めた。今の3年生が中3のとき、奄美市内にある金久中の野球部が九州大会ベスト4になり、そのメンバーからも数人が大島へ進学した。昨夏、新チームになって掲げた目標は「甲子園」。グラウンドの用具入れの壁には「島から甲子園へ」と文字が刻まれた。渡邊監督の方から「甲子園」という言葉を出して激励したことはない。「すごいな、こいつらと思いました」。大人の考えを超えた選手の意識の強さに指導者の方が驚かされたほどだった。

学校創立113年目を迎える大島野球部の歴史は古い。軟式野球部の創部は1924年。米軍占領下には駐留していた米軍と練習試合をしたこともあった。九州大会で準優勝した歴史もあるが、選手が憧れていたのは甲子園。だが硬式野球をするには施設も、費用も足りなかった。予算を通田に硬式移行は実現せず72年、ようやく硬式野球部が誕生。野球部が現在使っているグラウンドは当時の部員が整備したもの。また、当時は野球用具も選手がアルバイトをして費用をねん出したのだという。「甲子園を目指したかった。それだけだった」と当時のOBは語る。代々、甲子園への情熱は後輩に受け継がれ42年後、ついに甲子園へたどり着いた。

グラウンドの周囲には熱帯性の木々が生い茂りその中には蚊帳を持つハブが生息するという。マングローブの原生林があり、サトウキビの畑が風にそよぐ南の島。昨年、奄美群島日本復帰60周年に沸いた島民に勧れたさらにうれしい出来事。「島の皆さんのためにも勝ちたい」と武原主将。甲子園という新しい歴史がこの春、島に刻まれる。



グラウンド近くにはハブが生息するため、ボール探しもままならない。学校には備品として「ハブ取り」がある



奄美大島は鹿児島市の南西、約380キロに位置する。地図のほか、サトウキビ、サツマイモの生産も盛んだ。奄美群島は昨年12月、本土復帰60周年を迎えた